
鋼の錬金術師 ~ただ、幸せを願う人間のように~

黒簾 香菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼の鍊金術師 ～ただ、幸せを願う人間のように～

【Zコード】

Z9380Z

【作者名】

黒簾 香菜

【あらすじ】

エドとアルは賢者の石の手掛かりを求めて、とある生体鍊成で有名な村へやつて来た。けれど、そこには全く鍊金術師を見かけなくて困る二人。仕方がないから観光に・・・と思つた先には人体鍊成をやつた後が！？

おまけに、エドに抱きついてきたのは
「エド！・・・良かつた。生き返つて」

・・・・誰！？この娘？

人造人間のオリキヤラも、残酷さ

を見せながら動いていく

「ねえ、何で
皆を死に追いやったあなたが生きてるんですの？何故、死ぬべきで
あつたあなたが生きていて、姉様は死んだのです？何故、何故貴方
なんかが生き残ったの？」

プロローグ（前書き）

この小説は、小説力キコとこの所でやっている作品です。色々と内容は変えていますが基本的には変わらないと思います。

プロローグ

地道に掘つた秘密基地の穴の中で、私は陣を描いていた。

彼が残してくれた物の一つ、ノートに書いてある人を生き返らせる方法。それを使って彼を取り戻す。

本当はチョークと言う物を使うらしいが、地面に描ければ何でもいい。自分で作った小さなナイフで茶色い地面を削つていく。ノートに書いてある陣の様に、丸く大きな円。その形に地面を削つた後、外にある白い砂で浅い溝を埋めていく。

大分時間がかかつたが、茶色い地面に白い紋様が浮き出した。

彼と共に集めた材料をバッグの中から取り出す。

「水が三十五リットル、炭素が二十キログラム。アンモニアが四リットルで、石灰が一点五リットル・・・」

口に出した通りに陣の真ん中に材料を入れていく。

「リンが八百グラム、塩分一百五十グラム」

優しかつた母さん、

「硝石が・・・百グラム」

強かつた父さん、

「イオウが八十グラム、フッ素が七点五グラム」

仲良しだった村の人々、

「これは・・・鉄！鉄が五グラムで、ケイ素が三グラム」

そして、私が好きだった・・・否、好きなエドワード。

（絶対に、また私が生き返らせてあげる）

皆に会いたい一心で私は陣の上に手をのせた。

その後、地獄を見るとも知らずに・・・・・・

汽笛の音がなる。

今、この村の駅に一機の列車が止まつた。その中にある一つの車両から変わり者の二人組みが降り立つ。

「大佐が言つてた村つて、ここだつたよな？」

二人組みの中の一人、金髪金眼の小柄な少年が駅に降り立つた瞬間そう言つた。彼の名はエドワード・エルリック。‘鋼の鍊金術師’といつゝ名を持つこの国の最年少国家鍊金術師だ。

「‘東部の生体鍊成が有名な村’…………確かにここだよ」

同じく降り立つた二人組みの内のもう一人が、メモを読み上げた。彼は一メートルを越す全身鎧の巨大な少年、アルフォンス・エルリック（以下、アル）。エドワード（以下、エド）の弟だ。

エドとアルの二人はとある罪により、賢者の石”を探している。彼らがこの村に来たのも生体鍊成についての情報を一つでも手に入れ、その石に近づく為だ。

「でもさ~、こんな森とか畠しか無いような村に鍊金術師なんているのか？大佐に騙されたんじゃね～の？」

「そんなこと言つちやダメだよ、兄さん。情報が無くつたつて、たまには息抜きで観光でもしていこつよ」

「まあ、やつだな」

軽く納得し、エドは駅にいる駅員に観光地を聞き出した。

「なあ、すつゞく景色が綺麗なところがあるつても。行ってみるか?」

それを聞いてアルが頷くと、エドは早速素朴な道を歩いて行った。

+

「うわー、凄く綺麗。水が透き通つてゐるよ」

エドが駅員から聞いてきた場所は、予想以上に美しかつた。森や山はどこまでも続き、真つ青な湖の水は果てしなく透き通つてゐる。

ここは、村の外れにある巨大な湖。泳ぐ季節ではない為に湖にはエドとアル以外誰もいらず、湖は静まりかえつてゐる。

「すつづー、すつづー！一湖だぞ、み・ず・づ・みー」

予想以上に巨大な湖にエドは子供のよつてなしゃいでいた。その様子を、景色を堪能しながらもアルはゆっくりと堪能してゐた。

「兄さん・・・・・？」

ボーッとしていたアルは、エドが何処かに消えてしまった事に今まで気付かなかつた。キヨロキヨロと辺りを見渡して湖や森を見渡し、歩いて行つた。

しばらく行くと湖のそばに崖があり、そこには縦一点五メートル程の穴を見つけた。

「兄さん、何してるの？心配したんだよ？」

アルがそこに近づいて行くと、エドはゆっくりと振り返つた。薄暗い中、穴の中にいるエドの田の前にあつたのは

「アル。ここ、誰かが人体鍊成した跡地だ」

まだ微かに血の後が残る人体鍊成の鍊成陣だった。

オリキャライラスト

今回は、この小説に出てくるオリキャラのイラストを紹介したいと思います。

エド「へ～、更新が大分遅いと思つたらそんな事していたわけかな・る・ほ・ど？」

い、いきなりエドが怒つてゐる…？ま、まあ兎に角、今後出てくる主なオリキャラはこの三人です。

> 1 1 4 4 2 3 | 1 5 6 6 <

エド「皆して変な奴らばっかだな」

アル「兄さん、変な奴らなんて言ひやがやダメだよ」

エド「事実を述べただけだ…！第一に、何だあの右側の奴？血を舐めてるぞ？」

アル「うわ～、確かに。ちょっと作者、何これ」

このキャラは敵に回るほうですね。色々な意味で残酷な奴です。

アル「じゃあ、この真ん中にいる女の子とその横にいる男の子は兄妹？何か髪の色とか似てるけど」

エド「服の色も似てるしな」

いやいや、兄妹つて訳じゃないんですよ？でも、これ以上話すと
ネタバレ何で。。

エド「ネタバレか？」

アル「それじゃあこれ以上質問したら大変だね」

じゃあ、次は三人の中の一人を

♪ 1 4 4 2 2 — 1 5 6 6 ♪

「んな物ですかねえ？」

エド&アル「もつあえて何も言つまい・・・・」

あらら？一人して黙っちゃった。

まあ、生の腕はやっぱかったかなー？結構自信作なのに。

ついでに、私が書いてるもう一つの小説と絵が違うのは鋼の錬金術師っぽさを出してみよう！ということで、自分なりに漫画の絵を真似（？）した結果なのです。

アル「一応そこは考慮してたんだ・・・・？」

もちろん

それでは、次回はエドと

が、 つちやう？・・・・つ

微かに血で染まつた鍊成陣が、闇の中に浮かんでいた。大分古ぼけていたが、人体練成をした後の陣だとエドには一目で分かつた。

こんな場所で因縁の物を見つけると思つてもいなかつたエドは、ゆつくりと辺りを見回した。人の気配がするのだ。

（誰か・・・・いる？）

アルに待つよしに指示をして、エドは穴の奥へと入つていった。

穴の奥は光源が無く、光もどどかない為に暗くなつていていた。僅かな明かりで足元を確認しながら、ドンドン奥へと進んで行く。

「・・・・・H・・・ド・・・・?」

小さく、嗄れた、しかし澄んだ声。その声が聞えた方向を振り向いた瞬間・・・

「エドー！」

エドは、右側から何者かに抱きつかれた。

「つ？！」

驚きで硬直しているエドに気付かず、相手は無邪氣にエドの胸に顔を埋めている。

「エド・ウヘルガ・ムカウ・レシイム・シワ シワ・シワ・シワー！」

意味の分からぬ言葉の羅列に、よけいに混乱するエド。しかし、相手はそれに似たような言葉を口すたま、しばらくの間はしゃぎ続けていたのだった。

†

†

真白な空間に、それはあつた。三メートル位ある大きな扉。石でできたそれには、何かの紋様が刻まれている。

扉の前には少女が一人。

真白な空間と同化してしまったほどに白く長い髪。褐色の肌は滑らかでシミ一つ見当たらない。全てを見透かしたように爛々と輝く瞳には、喜びが浮かんでいる。

「あと、一日……」

澄んだ声でポツリと囁いた。

体型と声からして、少女だらうか。彼女は、Hドに抱きついたままはしゃいでいたが、Hドの反応が返つてこないことに気が、顔を上げた。

「Hド、ジヨル・ジータ？」

不思議そうな顔をして小首をかしげた少女の顔は、Hドと鼻が付いてしまいそうなほど近い。そのために、Hドはやつと少女の顔を見る」ことが出来た。

闇の中でも目立つ真白な肌。大きな爬虫類にも似た緑色の瞳を、長く、量が多めの睫毛が彩つている。ツツクリとしたピンク色の唇などの質がよいそれらのパーツは、整った位置に置かれていた。

完璧ともいえる、美少女だ。

思わず顔を赤くしたHドだが、対する少女は今までの言葉は何だつたんだと言いたいほどの滑らかな発音で話してきた。

「Hド、生き返ったときの衝撃で、言葉が分からなくなつちやつたの？」

優しそうな目が、心配そうに瞬いた。

その瞬間、魔法が解けたかのようにHドは正気に戻った。少女の腕を振りほどきながら、Hドは言つた。

「悪いんだが、俺はお前が知っているエドじゃ……」
少し目を少女から離した途端、少女の腕を握っていた手に体重がかかる。

「…………っ！？」

少女は、エドの服の裾を握ったまま、気絶していたのだ。

「…………」

「一体どうしたらいいかと悩むほど、困った状況になってしまった……」

手を伸ばして、持ち手を掴む。引っ張り上げてよく見ると、良い作りをした丈夫そうな物だった。持ち主を探す証拠になる物は無いかと、鞄をあさる。

中にはたくさんの、粉が入った袋と、酸化して茶色くなつた手帳。内容を見ると、予想通りに、人体練成の方法が書かれていた。

兄にこのことを伝えようとアルは顔を上げたが、エドはまだ来なかつた。

「あっ、兄さん！」

穴から出てきた兄に安心し、顔を上げたアルは嬉しそうな声を上げた。しかし、彼が少女を抱えているのを見て残念そうな顔をする。

「…………兄さん…………といといちやつちやつたんだね…………」

「何おかしな事言つてるんだ？」

「だつて、その子…………」

そう言つてアルが指さした少女を、Hドは地面に寝かせた。が、左側の服の裾が白い手に？まれてるので動かし難い。

そうして光の下で少女を見た二人は絶句した。

真白な肌に整つた顔。しかし、それらには全く似合わない物が彼女を覆つていた。

古い布が少女の頭に巻きつき、髪を見えないようにしていた。ボロボロの奴隸服は擦り切れ、おまけに裸足。まるで何処からか脱走してきた後のように。

「どうしてこんな格好をしてるんだろう？」

「俺が知るか！逆に誰かに訊きたい位だ……」

そう言つて溜息をつくHド、不思議そうな顔をしてアルが訊いた。

「え？ 知つてゐるんじゃないの？ だつて兄さんが連れてきたんだし」「分かんねえ。会つた途端に訳も分からぬ事言つて、騒いでぶつ倒れた」「

あえてなのか忘れたのか、少女に抱きつかれた事は言わないで
だつた。

「・・・・・あれ？ そういえば・・・」
「？？ 何か分かったの？ 兄さん」「
「一言？ だけ、意味の分かる事を言つてきたんだ。確か、『生き返
つた』とか『言葉が分からなくなつた』とか・・・」
「それだけじゃよく分からぬいよ・・・」
「後、俺のJとHでつて呼んでた」

ピクリとも動かない少女を見て、アルが心配そうに言つた。

「・・・・兎に角、病院に連れて行かなきゃね

エドとアルは病院を探してあちこち歩き回つたが、結局見つからず元の駅まで戻つてしまつた。

「僕、駅員さんに病院の場所を訊いて来るねー」

そう言つてアルは、エドと少女をベンチに置いていつてしまつた。袖はまだ？またままなので、エドもアルといつしょに・・・・と言つわけにはいかないのだ。

「あ～あ、結局何なんだ？」の子

エドの溜息は、汽笛によつて搔き消えてしまつたのだった。

しばらくして、アルが駅員を連れてきたのだが、エドは絶句するしかなかつた。

あまりにもその駅員が、可笑しそうだったので。

「アル・・・・・・」

「何？兄さん」

「何でこんな変な奴連れて来たんだアアアアアアアアアアアああああああああ！」

ひらひらのミニスカート、女性用の小さめの駅帽。着込んでいる物はどう見ても女性用だが、それを着ているのは正真正銘の男だったのだ。

「そう言われても、この人しかいないみたいで……」

アルが言葉を濁す。そんな二人の会話を聞いて、例の駅員はっこにっこ笑っていた。

「そんな言い方されても困りますなあ。これは昨日の宴会での罰ゲームとかですよ」

今にも扇子を取り出して落語でも始めそうな勢いだ。そんな笑顔のまま、駅員はベンチに寝かせてある少女を見た。

「ひちらが例の女の子ですねえ？それにしても、なうんでこんな布で覆つてるんでしょうねえ？」

そう言つた途端、エドとアルが止める間もなく駅員が少女の頭の布を外してしまつ。硬く巻いてあるように見えたが、簡単にスルリと布は外れてしまった。

「「「……えつ？」」

布が外れた少女の髪は、光に当たって輝いていた。その髪は澄んで艶やかな毛先だけが金色の青い髪。その純粧な青色は、染めたようには見えなかつた。

普通ではありえない髪色に、三人は思わず息を呑む。周りに見えないよう、慌ててアルは布を巻き直した。

何故こんな不思議な髪色をしているのか。

何処から来たのか。

人体鍊成を行つた人物なのか。

少女に対する謎は深まるばかりだ

エドとアルのいる駅の隣にある掘つ立て小屋で、何者かが電話していた。

「もしもし……主様ですか？」あらはナンバー83です」

『あら、久しいわね。ナンバー83。今日は一体どんな用なの？わたくしとしては玩具が見つかったなら嬉しいわ 早速持ってきて』

『

「いえ……違います」

大きな溜息をついて、その者は用件を説明した。

「確かに、一百年前でしたかな？カバラ人が滅んだというのは」

『ええ、そう言えばナンバー83にはその話をしたんでしたつけ？カバラ人の特徴と、滅んだことを』

「特徴は、毛先だけが金色の青い髪と赤い目。……でしたつけ？」

『正解よ……で？急にどうしたのかしら？』

相手は女性のようで、まるでお姫様のような口調だ。

『まさか、カバラ人を発見したとでも言つの？』

「そのままかですよ。今日やつて来た金髪金眼の少年と鎧の男が連れてきたんです。瞳の色までは見ていませんが、あの髪色は間違いようがありません」

『まあっ！嬉しいわ それじゃあ、狩りをしなくてはね。生け捕りよ、生け捕り！ああ、狩りなんて百年ぶりだわ！お父様もきっと大喜びね！』

実際に楽しそうな笑い声が受話器から聞えてくる。

『喜んでいただけたようで幸いです。それで、私はどうすれば……？』

『明日の朝の列車に彼らを乗せて欲しいの。明日の朝、どの列車に乗せるかは……』

『すみません、それは後で聞きます。ちょっと急ぎの用事があるのです』

それでは、と断りをいれて電話を切つた。そしてすぐに電話を病院につなぐ。

すぐにして欲しい、と場所を話して、また電話を切つた。

溜息をつき、掘つ立て小屋から出てきた人物は、アルが連れて来たあの駅員だった。

イラスト 春バージョン

Hド「春は桜の季節…」
Hド「春の絵を描いてみました

Hド「今回はまともなんだろうな…」
(拳の用意)

も、もちろんですよ…。
(殴らなにでくださこつ…)

アル「でも、作者の言葉つてあまりあてにならないよね?」

アル君まで…。
(シヨック…)

とりあえず、今回はこんな感じで…

↙ i 2 1 3 8 7 — 1 5 6 6 ↘

Hド「上の所、何か変じやないか?」

アル「確かに。ちょっと中途半端とこつか…」

何故か上の所が切れちゃったんですね…ちゃんと描いたんですよ。
(二人に原画を渡す)

二人「「確かに・・・・」」

ま、絵が描けたんで私は満足です

二人「（それで良いのか・・・・！？）」

あ、後エドが普通の腕になつてているのはぶっちゃけ手抜きです
(だつて、機械とか描くの苦手なんだもん)

エド「おいつ！」

アル「まあ、いいじゃん。兄さん。元の体に戻つたって考えれば」

エド「ま、まあ・・・・・そうだな、うん」

（アル君、ナイス！）

駅から病院まではかなり遠いので、病院から迎えに来てもう一つ事になつた。先程の駅員に連絡を入れてもらい、一人はしばらく待つた。

そして、二十分後……

病院からやつて來たと言う女性は、医者にも、看護師にも見えなかつた。小型の車から勢い良く飛び降りるその行動は、医者と言つよりも元気満々なトラックの運転手の様である。

白いレースのショートパンツに白と紺のボーダートップス、ウエッジサンダルを履いた可愛らしい黒目女性だ。小麦色の肌と黒髪のボブが、可愛らしさを引き立てている。

「おつ？」

ちよつと生意気そうに腕を組み、アル達に気付いた彼女はドンドン近づいて来る。

「あたしの名前、知りたい？あたしはね、ライリーよ。ライリー・アラー」

誇らしげにいきなり名乗つたライリーに、エドは馬鹿にしたように言った。

「誰もそんな事訊いてね〜し」

「ガキは黙れ」

しかし、ライリーの言葉に一蹴されてしまった。

じろじろとエドとアル、そしてベンチに横たわった少女を見て、ライリーは直球で言った。

「この子達の保護者様だよね？」

・・・・・アルの鎧を叩きながら。

鎧姿のアルは身長が二メートル近くあり、確かに大人（保護者）に見える。しかし、そんなアルよりもエドの方が年上なのである。ライリーの行動は完全無視して、エドは話した。

「保護者なんて知んね～よ。俺らはこ～つの事を拾つただけだし」

袖を少女に？まれたまでは、あまり真実味が無い。そんなエドに、見下すようにライリーは言った。
あの禁句を。

「チビザルは黙つてくれない？今忙しいんだから」「誰が目に見えない位のチビだあああああああ！」

大暴れするエドを抑えて、アルは構わずライリーとの会話を続けた。

「本当に、拾つた（？）だけなんです。出合つてすぐに倒れてしまつて・・・・」

「それで、何かの病気だと思ったわけね。あたし、鍊金術の方が得

意なんだけど親が医者だから一応医学も齧つてあるの。そのあたしが見たところ、病気では無いみたい

「そうですか・・・良かつた」

安心したアルが手を緩め、エドがアルから離れたが、すっかりエドは大人しくなっていた。状況等を詳しく聞きたいとのことで、二人も一緒に病院へ向かうことになった。

「早く乗つて！」

車に先に乗り込んだライリーが呼んで来る。その声を聴き、少女を車に乗せた二人は車に乗り込んだのだが・・・

「いっつえええええ！」

座席に座ったエドだけが悪戯で置いてあつた画鋲で飛び跳ねたのだった。

「あハハっ！ダッサーいつ！今時こんなのに引っかかるてるんだ？馬鹿みたい」

そうやってからかつたライリーは、エドのパンチでしばらく運転不能になるのだった。

過去に一度だけ、私は村に戻った事がある。その時はもう誰もいなくて、ただただ周りに死体ばかりが転がっているだけだった。花は踏まれて土に汚れ、刃が折れた剣が落ちている。あんなに澄んでいた川は燃やされた家々の残骸と血で赤くなっていた。

その風景は、まるで世界の終わりのよう。

生き物の声がしない。人間のいる気配も無い。

植物の息吹さえも途絶えていた。

血塗れた大地の上をふらふらと一人で歩く。エドも失ってしまった私にはもう何も無い。すっかり昔と変わってしまった故郷は寒い。

「おいっ！――そこで何をしている！？」

急に後ろから腕を？まれる。無理矢理振り向かされた私の視界に入つたのは、かつて村を滅ぼしたあの・・・・・

「放して！！」

腕を振りほどくため、必死に私は相手を叩いた。

十

「痛つッ！」

少女の脈を計っていた医者の手が少女に叩かれ、慌てて医者は手を引っ込めた。叩かれた部分を痛そうに擦りながら、

「脈も正常だし、怪我や病気のわけでもないし、大丈夫ですよ。ただ、精神的なショックと疲れのせいで寝ているだけです。安静にしていれば、じきに目が覚めるでしょう」

と言つて部屋を出て行つた。

今エド達がいるのはライリーの親が経営している病院の個室の中。ベッドの中で、少女は静かに眠つている。

「どう？あたしの親、凄いでしょ

特に何もしていないうライリーが偉そつに胸を張つた。そんなライリーを見てエドが呆れて言つ。

「お前は特に何もしてねーだろ? が」

「黙れチビガキ」

「だあれがミジンコだーつるせーんだよ、お前はーいりこちー。」

相変わらず何故か仲の悪い一人である。そんな風に喧嘩をするHドをアルはなんとか押しとどめた。エドが押しとどめられていく間に、ライリーはサッサヒードの射程距離外まで逃げ出した。

「あ、この子、そろそろ皿を覚ましそうだよ」

それだけを言つて、ライリーも部屋の外へと出て行つた。ライリーの指さした先にいるベッドの上の少女は、ゆっくりと皿を開けていた。

少女はゆっくりと目を開くと、体を起き上がりせりへりを辺りを見渡した。見たことの無い場所に困惑しているようだ。

爬虫類にも似た緑色の瞳を瞬かせて、Hドを視界に見つけた彼女は顔を綻ばせた。ベッドの横の椅子に座っているHドに手を伸ばす。

「Hド..」

「困惑しているHドの腕を?むと、少女は少し不安そうに顔をしかめた。もう一度周りを見渡して、

「うう..う..う..」

ポツリと呟く。そんな少女にアルが声をかけようとしたが、Hドが?まれていらない片手でアルを制した。

「ううは、病院だ」

「エラーイン..」

少女は訳が分からないとでも言つように首を傾けた。それと同時に頭に巻いてある布が微かに顔にかかってくる。それを片手で直し、Hドの言葉の続きを待つた。

「わ、病院。それからお前、俺のことを誰かと勘違いして無いか?」

「えつ?..?..」

更に少女の首が傾く。

「あなた、エドワードじゃないの？」

「俺はエドワードだが、お前の知ってるエドワードじゃない。俺の名前は、エドワード・エルリック。こつちは弟のアルフォンス」

エドの説明と共に、アルが少しだけお辞儀をする。

そんなアルを見た後、確認をするようにもう一度少女は呟いた。

「エドワード・シュボラじゃないんだ……」

その言葉を聞いて頷いたエドを見て、悲しそうな顔をする。本当にエドの事をエドワード・シュボラだと思っていたようだ。

「で？お前の名前は？」

ショックを受けて今にも泣き出しそうな顔をしている彼女を労わるように、優しい声でエドは聞いた。それに答えて少女は顔を真つ直ぐにエドとアルの一人に向け、しつかりとした声で言った。

「私は、マリアナ・カバラって言います」

人違いに納得したマリアナは、引き止める一人を振り払い、何処かへと帰ってしまった。

アルが穴の中で拾った鞄は彼女の物だつたらしく、それも一緒に。

しかし、たつた一つだけ、ある物をベッドの中に忘れて行って・
・
・

「 ～ ～ 」

呑気な感じだが、テンポの速い曲。それを鼻歌で歌いながら、ラ
イリーはベッドメーキングをしていた。マリアナが寝ていたベッドの布団をどかせて、その布団のシーツを
はぎ取る。シーツだけを洗濯かごに入れると、洗い立ての新しいシ
ーツを布団に付けた。

「 ～ ～ ～ 」

曲がサビの部分に入る。

敷布団にかかっているシーツを外そつと、ライリーがベッドの上に
手をかけると・・・・・

こつこ

「 ～ ～ ～ ～ あれつ？」

手に当たつたのは柔らかいシーツではなく、何か別の硬いもの。
丸い感じがするし、石か何かだろうか。

そう思い、手に当たつた物に視線を移す。

「これ・・・・つて確か」

真っ白なシーツの上にあつたのは、握り拳よりも少し小さいぐら
いの宝石。青い色をしたそれの中には白い花のような物が埋め込ん

である。

その宝石を手にして、もう片手で抱えていた布団をベッドの上に置くと、ライリーは小走りでその部屋を出て行つた。

「ねえ、チビザル&鎧さん」

「…………いきなりなん何だよー第一に、チビじやね～～～～～～～」

のんびりとお茶をいただいていたエドとアル（勿論アルは飲食していない）の所へ、ライリーは飛び込んできた。

無警戒にお茶を口にじてしたエドにどうしては迷惑なことこの上ない今にもライリーに掴みかかるつとするエドを抑え、アルはライリーに聞いた。

「……え？ ど、どうかしたんですか？ ライリーさん」

「あっ、あのねえ。わつきの女の子。マリアナちゃん・・・・・
だけ? その子がベッドで忘れ物といつか落し物してつたんだけ?」

ライリーは片手に持った青い宝石をアルに見やすいように突き出

した。その宝石を見て、エドのお茶のお替わりを注いでいたライリーの母が余計なことを囁つてくる。

「あら、それ見たことあるわ。ブルーダイヤって書つんでしょう? 高いのよねえ。普通のダイヤよりも貴重なんでしょう?」

高いのよねえ。普通のダイヤよりも貴重なんでしょう?」

『高い』と聞いてヒドとアルは思わず驚く。その表情を見て、ライリーは満足そうにつなぎた。

「……つて」と、これ返してきて

「せぬーー!?」「えーー!?」

驚いているアルの手に無理にブルーダイヤを握らせると、ライリーは悪戯っ子のような笑みを浮かべた。

「だって、あたし忙しいし。暇のあんたらだけじゃん？」

「だからって……」「

エドが反抗しようとするが、

「嫌なら今夜、泊まらせないけど？」

そう言われたら聞くしかない。この家の周りには煙ばかりで、泊めてもうえそくな家はここしか無い。

結局は、ライリーに逆らうこと出来ないのだった。

ブルーダイヤを返すために外に出たのはいいものの、マリアナの家も行先も知らないのだ。とりあえず一人は、畑や森林ばかりが延々と続く粗末な道を歩いていた。

「……ねえ、兄さん。どうするの？」

「どうするって訊かれてもなあ……まあ、心当たりのある場所に行つてみるしか無いだろ?」

手の中でブルーダイヤを転がしながら、エドはアルの問いかけに答えた。確かに、マリアナとは今日会つたばかりで、どうするかと聞かれても困ってしまう。

結局一人は、心当たりであるマリアナと最初に会つた(?)湖へと向かつたのだった。

田もすっかり傾き、空が夕陽に染まる。ヒドヒアルは湖にたどり着いた。

湖は空の光を反射して美しいオレンジ色へと変わっている。しかし、湖と対比して周りの森は薄暗い。

・・・・・ザツ、ザツザ・・・・・

しんと静まり返った中で、何かを掘る音がする。一人は木々をかき分けながら、開けた所へ走ると・・・・・

「「いた・・・」

頭に巻いた布が落ちてくる度に下手で直しながら、マリアナが地面を掘っている。比較的白い砂をそれよつも白く細い指ですくい、何処かへと運んで行く。

その場の雰囲気のまれ、全く声を出せないままヒドヒアルは

彼女の後を追つた。

マリアナは砂を手のひらに乗せたまま、穴の中に入つて行く。その穴を覗き込み、エドとアルは絶句した。

マリアナは手の中の砂を、傍らに置いた鋸びたナイフで掘った地面の溝に落としていた。その溝の形は一人が忘れもしない、人体鍊成の鍊成陣。

「マリアナ・・・

思わずこぼれてしまつたエドの言葉に気付き、マリアナがこぼらを振り返る。その瞳は、困惑に揺れていた。

「お前は、もう一度人体鍊成をしようとしているのか・・・・?」

「お前は、もう一度人体鍊成をしようとしているのか……？」

エドがそう呟いた途端、マリアナは驚愕で硬直した。しかし、その表情もつかの間。誤魔化すように彼女は顔を振り、微笑んだ。完璧なその表情は、この状況では逆に不自然だ。

「何のことですか？」

上手く体を動かし、背後にある鍊成陣を見せないようにする。病院着を纏つたその姿は、ひどく儚げだ。必死になつて隠そうとする彼女を見て、大きく溜息を吐くとエドは軽くアルに振り向いた。

「アル、あの事話してもいいか？」

「えつ……？」

驚くアルだが、兄の考えを素早く読み取り了承した。それを聞いたエドは徐に自分の着ている赤いコートを脱ぎ、手袋を外した。その下から現れたのは、闇夜に鈍く光る機械鎧^{オートメイル}。隣でアルも、鎧の頭を外した。鎧の中身は、空。ただ、鎧の内側に血の紋様が刻まれているだけ。

「えつ……？」

そんな二人の姿を見て、混乱したマリアナは確認するようにアルの鎧の中を覗き込む。

「空っぽ・・・??」

「やつ」「やうだ」

エドとアル。二人の声が重なった。微かに青ざめた顔を、マリアナはエドに向けた。

「どうこう・・・」ことですか？」

震える声を押さえつけ、彼女は質問した。

「俺ら二人が幼い時、母さんが流行り病で死んだんだ。俺らは母さんにまた会いたい一心で、人体鍊成を行つた」

それは、エドとアル。二人の苦い記憶。

「しかし、鍊成は失敗。俺は左足を」

「僕は全身を持つて行かれた。そんな僕を、兄さんは右腕を引き換えにして鎧に魂を定着してくれた」

「人一人生き返らせようとしてこの様だ。それなのに、お前は人体鍊成をして無事だったんだ。また行つたら、次はどうなるか分らない」

その時の光景を思い出したのか、エドは自嘲気味に笑つた。アルは頭を元の位置に戻す。

「「人体鍊成をしてはいけない」」

二人の声がぴったりと重なる。真っ直ぐなその声と瞳には、真剣さが感じられた。

その言葉が向けられた本人であるマリアナは、その言葉をしつかりと受け止めて、コクリと頷いた。

「わかりました」

ぐるりと舞い、人体鍊成の陣に向き合つた彼女は自らの手でそれを消し去つた。

アルから受け取つていたバックから人体鍊成の材料とも思わしき物質をその手に握りしめ、思い切つて全てをぶちまける。

「…………やよつなら

その言葉をぽつりと呴くと、すっかり軽くなつたバックを抱え、自分を待つていてくれた一人に向き合つた。

「行きましょつか」

そう言つて笑う彼女の笑みは完璧で、頬には涙の後さえ残つていなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9380n/>

鋼の錬金術師 ~ただ、幸せを願う人間のように~

2011年11月15日14時05分発行